

栗本薫

魔界水滸伝12



KADOKAWA NOVELS

人類壊滅の日より一年。地球奪還への
時空を超えた大いなる闘いが始まった。
空前の**伝奇SF巨編**、第二部開始!



ガクカヘルズ

昭和六十二年五月二十五日初版発行
昭和六十三年七月二十五日五版発行

著者 栗本薫 くりもと かおる

発行者 角川春樹

まかいすいこでん
魔界水滸伝 12

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社宮田製本所

装丁者 岡村元夫

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二丁目三番 振替東京三一九三〇八
二〇三 電話 営業〇三二八七六三二 編集〇三二八七八五二

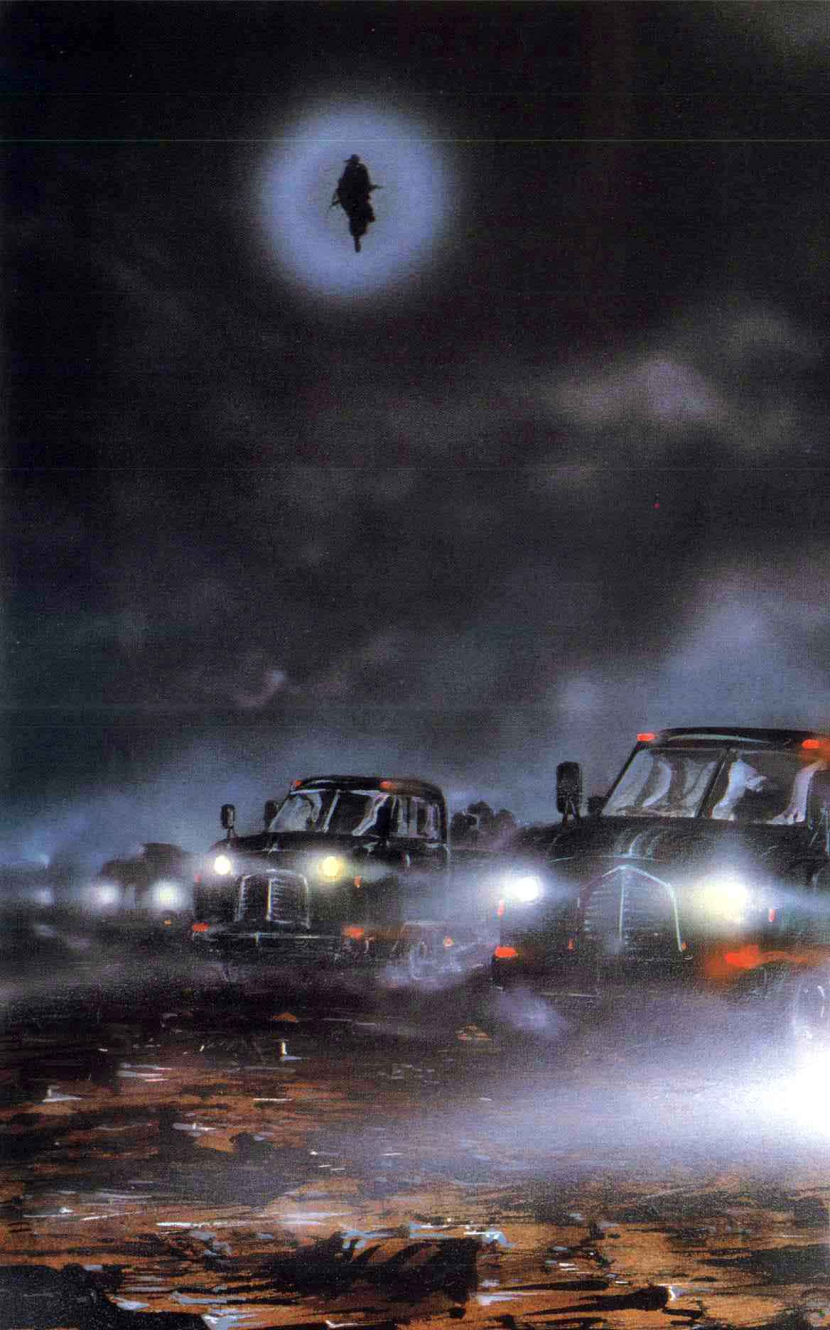
Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-04-770912-3 C0293



滝つぼに、一人の男がいた。滝のさなかで、長い髪を水中にさかだて、じつと結足加^{けつ か ぶ ぎ}跣坐の印形を組んで、
これですでに何日、何夜か。安西雄介^{あん さい ゆう けい}であった。(本文第二章・3より)





此为试读, 需要完整PDF请访问: www.ertongb.com



「なあ蛇君、人間て奴あさ」ルシファーは言った。「かあいもはねえ、つくづく」——がれきの山。死の静寂。
かすかな雷鳴。みづちの若長は、ゆつりと、あたりを見まわした。(本文第四章・2より)

おお——悪夢の世界。じつこの光景を見おろしている、この惑星に太古よりすまう巨大な一匹の魔。ダー
ク・パワーの軍団は、灰色に明けてゆく空のもとを進んでいった。(本文第四章・4より)▶

KADOKAWA NOVELS

魔界水滸伝12

栗本薫

カバー絵・口絵・本文イラスト／永井豪

魔界水滸伝 12

目次

プロローグ 1

11

プロローグ 2

22

第一章 1

36

第一章 2

49

第二章 1

62

第二章 2

75

第二章 3

86

第二章	4	99
第三章	1	112
第三章	2	125
第三章	3	137
第三章	4	152
第四章	1	163
第四章	2	175

第四章

3

189

第四章

4

202

プロローグ 1

空が青い。

青くやわらかな空の下に、ひろびろとした灰色の大地がひろがっていた。

はるか彼方に、山々のなだらかな起伏が見える。まもなく、春——という時分であった。

灰色一色に、くすんで、なかば死んでいるかにみえる、大地……

だが、よくみると、大地は、死にたえてはおらぬことがわかる。かたい大地を割って、ごく小さな、しかしたしかな緑いろの芽生えが、そこかしこにひそむ生命の息吹きを見るものに伝えてくれる。

大地は、死んではいないのだ——
すでに。

地球全土をおおいつくす、あのおそるべき年——のちに、もしも人間の歴史がはるか未来までつづくだけのいのちを回復し、過去を語り伝えるだけの秩序を再び回復することがあるとすれば、おそらく《大災厄》の年、としていつまでもいまわしく語りつがれるにちがいない、あの一九八×年から、すでに、丸一年がすぎさったのだ。

一年は、短くもあり、長くもある時間である。

——あれほどたしかにみえた、人類の文明——かつてない到達地点の高さを誇り、原子の火も、宇宙の神秘もきわめつくしたとすら信じかけていた、あの二十世紀人類の傲りを、すべてうち砕き、くつがえし、失わせるに十分なまでに。——そしてまた、その未曾有の地球的規模の災厄から、ともかくも大地が——人類はともかく、母なる大地が立ち直って、また再び、芽ぶきの春をむかえる用意をととのえるにも十分なまでに。

人類の文明がいかに二年前のおもかげをまったく

とどめておらぬからといって、それをもって、大地もまたついえ去つたものとするのは、あまりにも傲慢な、人間たちの思いあがりにはかならなかつた。大地は、生きてゐる。いかなる巨大な津波、洪水、氷河期、火山の噴火、大地震も、いかなる天変地異も、そのかたちをかえこそすれ、結局ほろぼし去ることを得なかつたこの偉大な母なるガイアにとって、こんどの災厄とて、とうていそれに激甚な、とりかえしのつかぬ被害を与えるものなどとは、言えなかつたのだ。

たしかに、そこにはもう、かつてのようにこまかにはりめぐらされたハイウェイもない。わずか一年のあいだに、それらはすべて音たててくずれ、草におおわれ、またその枯葉にうずもれた。

また、巨大な偉容を誇るビル街もない。その中で、秒きざみの狂おしさでかけずりまわる、はつかねずみというよりは実験用のラットでもあるかのような人びとももういない。

気がいじみた騒音をまきちらす車も、拡声器も、飛行場もない。ちり紙交換の声も選挙のスピーカーも、母親が子供をのしる声も、猥雑な活気にあふれた市場のざわめきも、眠けをさそう授業の声も――

すべては、原初の静寂にかえつた。まだ、生きとし生けるものがこの地上にみちみちてはいなかつた時代の、永劫の圧倒的なしずけさ——しんとうごかぬ空気が、それ自体の重みでのしかかってくると思わせるような、それほどの——静寂。

ただ、いたずらに、明るい陽光がふりそそぐ大地は、平らにひろがり、その下にいかなる瓦礫の山をかくし、いく千の生命をのみこんだとも語らぬ。

空は青くやわらかく、排ガスをまきちらす車もいなくなつたゆえ、それはまったくかつての恐ろしいまでにすみきつた、清く甘い美しさをとりのどして高かつた。春のさかりもま近い、ほのかなおぼろの色あい、そのすみきつた透明さの上にやわらかくぼ

かしをかけているのもここちよい。

どこかで、鳥がなく。ほんのときたまの、この声は、しかしこの静けさを、破るよりもむしろひとときわつよめるかに思われる。

それにしても――

それは、何という災厄であつたことか。

二十世紀はじめから半ばにかけてうちつづいた、二つの世界大戦――それを皮切りの巨大な弔鐘の序曲として、人びとは、しだいに、それが天命をまつとうしたものであるのかどうかはまったく知りえぬまま、少しずつ、少しずつ、ある予感に馴れてゆきつつあつたのだつた。

それは、(我れわれは、二十一世紀を迎えることなく、ほろんでゆくのかもしれぬ)という、ほとんど確信にちかい思ひであつた。それはそのまえの世紀末にも、西暦一千年を迎えようとする千年前の世界にも、同じように存在した終末の予感ではあつたのだが、しかしそれはいつも、こんどこそは真実で

ある、と主張する人びとに支えられてきた。

たしかにものごととはしかし、「今度だけ」は、異なっているようにみえた。

数知れぬ、いにしえよりの予言の書が、「二十世紀の終り」をさし示していたのは事実であつた。パチカンの法王庁の奥深く秘蔵された「ファティマの書」も、かのノストラダムスも、ピラミッドの壁にきざまれたという未来への予言も――すべてが、申しあわせたように、「一九〇〇年代の終り」を、人類文明――と多くの場合は、世界そのもの――の終末、として名ざしていた。

人々の心がそのようにふるえているゆえに、予言が生まれるのか、予言が存在するゆえに、人の心がそれに支配されてゆくのか。

それは知らぬ。――が、人々は、二度の世界大戦にうちのめされ、人類史上かつて知らぬ巨大な虐殺や戦死者の数をその身に背負い、既に何かを予感し、うけいれる心になっていたかもしれない。

人心はしだいにすさみ、荒廃し——さまざまな新しい宗教が、きわめていかがわしいのもそうでもないのも、少し疑わしいのもこっけいなものも含めて、たくさんの信者を獲得するのに、何の苦もなかった。そのこと自体からして、人々が、何がなつねに平和な日々の底にひそんでいる不安におののき、すでに形骸化して強烈な力を失っているかにみえる大宗教よりも、もっとたしかな身をよせるブイをもとめはじめていたあかしであった。

世におこる事件は妙に凄惨の度を加え、それにつれて人々の心はどぎつく、おちつかず、よりつよい刺激をもとめてやまぬようになっていった。猟奇的で残忍な事件、刹那主義におちいる心、無気力で、人々への共感と理解にいたるすべそのものも断たれてしまったところ。

精神症が蔓延し、子供たちは、あるは弱いもの、ハンディを背負うものを苛め、あるは家の自室にカギをかけてとじこもり、あるはたいしたわけもなく

死に急いで、人の子の親たちをパニックにおちいらせた。有名人の自殺や事故死があいつぎ、しだいに若死する人々が目につきはじめていた。

狂おしくめぐりつづける輪廻の車——

それにのり、おりることのかなわなくなったもののように、人々は、自分にも理解できぬ狂奔の中にかりたてられていったのだ。欲望はとどまるところを知らず、人々は、にくしみとそねみとねたみにみち、他人を嘲弄し、さげすみ、傷つけることによつてだけ、自己の不安を他におしつけ、平和と安全と満足とをたしかめることができるかのようであった。かつてこれほどに、マスコミが、人々が、互いに対して無慈悲で、差別意識にみちて、攻撃的で、露悪的であったことはなかった。

こわいもの見たさの感情は極限まではりつめていた。人々はオカルトに異様な関心をよせ、「死後の世界」について狂ったように知りたがり、血なまぐさいホラー映画や、スプラッタ・ムービー、それよ

りもさえもつと獵奇的な現実の事件のニュースに熱狂した。そのさまはまるで、死期を悟った病人が、これからゆかねばならぬ来世について知らなくては、恐しくて死ぬこともできぬ、とだだをこねているにも似ていた。

性はいつそう入り乱れ、商品化され、あからさまになり、同性愛や倒錯がもてはやされぬまでもごくごくありふれたものとなり、そしてそれを罰する神の火でもあるかのように業病が来た。

それまで人々に知られなかった奇怪な病がいくつもあらわれた。そのあらわれかたはいかにも唐突であつたので、いよいよ人々に終末のはじまつたことを実感させずにはおかなかつた。それでもなお、人々はそれまでどおり生活し、何ごともなかつたかのようにふるまおうとした。

二十世紀がおわりのさいごの部分に近づくにつれて、啓示はいよいよあからさまであると思われた。世界各地でひんぴんと、巨大な死者を出す大地震が

おこり、火山の爆発、噴火があり、飛行機事故があいつぎ、政変、要人暗殺、局地紛争がたえまなくつづいた。核実験はすべての人々の良識を嘲笑するかのようにつづけられ、世界は異常気象と冷害に見まわれた。

たくさんの動植物が絶滅し、地球の三分の一をまきこむ、巨大な早ばつがやって来て、何千万人を餓死させるすさまじい飢饉が訪れた。そこへ再び業病がおそいかかり、他に何ごともなくてさえ、そののみですでに十二分の滅びにほかならぬ、と人は思つてもよいはずであつた。

ところが、それだけでさえなかつたのだ。

しだいに、数々の兆候が、『滅亡』にむかつてうごめきだすかのように、あやしく世界は変貌しようとしていた。

はじめは、ひそやかに、そして、しだいに激しく音たてて――

まず、その変容の兆候は、人々の間にひろまつた